

第十四回国際サンスクリット学会報告

望 月 海 慧

はじめに 平成二一年九月に京都大学で開催された第十四回国際サンスクリット学会に参加した。筆者はこれまでインドにおける大乘経典のアンソロジーやインド仏教僧ディーンパンカラシユリージュニャーナの研究をしてきたことから、その専門分野はインド仏教となろうが、近年はチベット仏教研究に重点が移行している。その前者についても、取り扱う資料はあくまでもサンスクリット文献から翻訳された古典チベット語に翻訳された文献が主であった。それ故にこれまで同学会に参加することはなかった。

今回の学会開催については、すでに平成一八年にロンドン大学で開催された第十三回国際仏教学会の際に、徳

永宗雄先生（京都大学）から聞いていた。その時から、どのようなタイトルなら自分に発表できるのかを考えていた。そんな中で「インド数学における最大数」というテーマがみつき、それを用意していたことについては、本誌の前号に記した通りである。発表申し込みの締切りも近づき、すでに発表したこのテーマを数学の問題のみに書き換えてエントリーしようと思っていたのだが、斎藤明先生（東京大学）より、シャーンティデーヴァと『集菩薩学論』に関するパネル参加のお誘いをいただいた。他のメンバーは、ポール・ハリソン先生（スタンフォード大学）とスザンヌ・ムロジック先生（マウンツ・ホリヨーク大学）とのことで、筆者だけがシャーンティデー

ヴァを専門に研究してはいないわけだが、求められている役割は明快であった。シャーンティデーヴァとディーパンカラシュリージュニヤーナ、あるいはインド仏教におけるアンソロジ文献の系譜というテーマがすぐに浮かんできた。ハリソン先生も筆者の後者の研究に言及してくださっており、パネル参加を断る理由は何もなかった。

サンスクリット学会と聞くと、言語学研究の学会という印象があるが、より広くサンスクリット文献に関連する学会である。それ故に研究部会も、ヴェーダ学、言語学、叙事詩とプラーナ、アーガマとタントラ、サンスクリット文法学、詩・戯曲・美学、サンスクリットと地域言語と諸文学、科学史文献、仏教学、ジャイナ教研究、哲学、宗教史、祭式研究、歴史学・碑銘学・美術史、法と社会の十五部会におよび、これにパンディット会議と特別テーマ「写本」が加わっている。まさに仏教学と同様に、人文科学に限定されない総合科学の国際学会である。それ故に筆者も自らの研究により数学の領域に参入

しようという意図もあったのである。この多様性は仏教学も含めたインド学の学会運営において学際的研究が求められていることを示すものであり、このような視点は、仏教学研究における新たな研究領域を生み出すヒントを与えてくれるものとなる。

いろいろなことを思いめぐらすものの、本務校の授業と雑務などに時間をとられてしまい、自らの発表に新たな研究資料を加えることもできない状況であった。とりあえず、これまでの研究をまとめる形で発表資料を作成し、京都に向かうことになる。

九月一日（前日より学会の受付は始まっており、オープニング・セレモニー直前の慌ただしさを避ける配慮がなされている。開会式に続いて行われる基調講演では、ロミラ・タパル（ジャワハルラール・ネール大学）による「初期インド史からの歴史的伝統」と服部正明（京都大学）による「京都とサンスクリット研究」が行われた。

残念ながらどちらも聴講できなかったのだが、後者は本学会が京都大学で開催される意味を考える上でも、とても重要な発表であったと思われる。もちろん辻直四郎や原實などの世界的に著名な学者は東京大学にもいるのであるが、京都大学の組織力が世界的な競争力を培ったように思える。それは前者が「インド哲学・インド文学」という狭義のカテゴリーにより研究の深度を求めるのに対し、後者は「インド古典学」という広義のカテゴリーにより研究の多様性を求めるように、目指すところが違うことにもよるのである。ただしヨーロッパにおけるインド学は後者の方法論に近いように思えるが、二一世紀のインド学・仏教学の方法論を考えるならば、さらなる多層性を必要とするであろう。

午後からは、一般の発表が始まっている。仏教学の部会では、まず次の発表が行われた。

吉水千鶴子「チャンドラキールティの中観思想における主張命題の論理的評価」

第十四回国際サンスクリット学会報告（望月海慧）

ホルスト・ラジック「デイグナーガの sambandha について」

酒井真道「ダルマキールティによる滅の無因の解釈」

御子上恵生「ヴァイシェーシカにより支持される指示

されるもの (vyanga) と指示するもの (vyatikā)

との関係に依存する普遍 (samyā) の実在に

対する仏教徒の批判」

パトリック・マッカリスター「ラトナキールティは

ダルマキールティを否定論者の肯定者であると信

じていたのか」

石田尚敬「仏教論理学派における抽象名詞の解釈」

これらの仏教論理学に関係する発表が初日に並んでいる

ことは、一九八〇年代より始まったウィーン学派を中心

とする論理学研究がまだ仏教研究の主流の一つであるこ

とを意味しているようにも思える。

晩のセッションでは、次の二つの発表が行われた。

赤羽律「中観の世俗諦について」

根本裕史「チベットのドウラにおける三種の断
[nam good]」

後者は本学会で発表すべきテーマなのかは疑問であるが、個人的には興味深いものである。おそらくこのようなケースは、他の部会でも予測できることであり、サンスクリット学の派生研究として意味があるのだろう。ただしチベットの立場では、サンスクリット文法に関するチベット語文献もあり、そのような発表もなされるべきであろう。もちろんこれらの仏教学の部会以外でも、仏教に関する発表は行われており、「アーガマとタントラ」の部会では、「仏教とシャイヴァ・タントラ」のパネルが設けられ、次の発表が行われた。

苦米地等流「仏教の Pramādyā 周期におけるトゥ
ンブルと彼の四姉妹」

ロナルド・ダヴィッドソン「非仏教の伝承との緊張
状態における七世紀の仏教タントリズム―儀礼的
な舞踏振付け法と有神論的イマジネーション」

山野智恵「錬金術師ナーガールジュナー―仏教とシヴァ
派タントラの伝承の合流の伝説」

種村隆元「Kriyasamgrahapāṇikaにおけるシヴァ
派の平行句」

永ノ尾信悟「バラモン教文献と仏教文献におけるバ
リ供養」

S・A・S・サルマ「儀礼マニユアルにおけるシヴァ
派とヴィシュヌ派の崇拜システムの統合―ケーラ
ラの儀礼文献の独特な特徴」

ドミニク・グッデイル「初期タントラ文献、主に
『シャイヴァ・シッターンタ』と著者の相対的年
代論の仮のスケッチ」

ディワカル・アーチャーリヤ「パーシュパタの年代
論と宗教実践に対する新証拠」

インドを旅行すると、仏教はヒンディー教の中に含まれ
ているような印象をもってしまいが、両者を対立項の軸
で捉えるだけでなく、連続として捉える視点も重要な

かもしれない。初日の発表終了後、レセプション・パーティが開催された。

九月二日 学会への実質的参加はこの日からになるが、京都大学に向かう前に、学会発表の成功を祈願するために寄り道をする。地下鉄を今出川でおりて賀茂御祖（下鴨）神社に向かう。世界遺産に登録されたこの神社が未訪問だったので立ち寄ったのだが、自分の発表の出来に不安があり、このパワー・スポットで神の力を授かるうという意図もある。鴨長明の河合社から入り、参道を上って行く。楼門を入り、舞殿、みたらし社、本殿を拝観した後、昼食をとって大学に向かう。

もちろん神社を参拝している間も、早朝より学会発表は進んでおり、午前中の仏教の部会では次の発表が行われている。

森山清徹「シャーンタラクシタの自己認識論とシャーキャブッディ」

第十四回国際サンスクリット学会報告（望月海慧）

那須円照「一異の概念の系譜—アビダルマから唯識

へ」

ヴィレーンドラ・クマール・アランカル「『ミリン

ダパンハ』の民間伝承」

これらの発表に続いて、「インドの宗教哲学環境における聖典の権威と護教学—大乘の護教学」のパネルにおいて次の発表が行われた。

ピーター・スキリング「ブッダを招来する—経典と

陀羅尼における仏語の力」

ジョゼフ・ワルサー「經典対論書—社会学的見地」

堀内俊郎「大乘と方等—大乘の権威の証明に焦点を

あてて」

これらの発表は、インド仏教思想史における聖典観の変遷を考える上で、興味深いものである。

百万遍から大学に入ると、見慣れた海外からの参加者に出会う。まずは、レジストレーションを行い、仏教部の部会に参加する。午後の発表では「インドの宗教哲学

環境における聖典の権威と護教学―宗教と哲学の間の護
教学と解釈」のパネルにおいて次の発表が行われた。

ピョートル・バルチェロビッチ「ジナの一切智とジャ

イナ教の真理」

片岡啓「聖典の伝承―クマールラとダルマキールティ
にわたる解釈の問題」

ヴィンセント・エルティンガー「仏教認識論の護教

学の系譜に関して」

もちろんジャイナ教やインド哲学の部会も設けられてい
るのだが、これらの発表が仏教学の部会で行われるのは、
仏教学研究における他学派の文献研究の重要性を示すも
のである。すなわち仏教学研究は仏教文献だけを読むだ
けでは不十分であり、ヒンドゥー教における仏教の位置
を再構築する必要がある。我々はインドから伝わった仏
教はインドにおいてもメジャーなものであったと身内に
甘い認識をもってしまいが、他学派から見た仏教という
視点は重要なものである。

休憩をはさんで、同じ「インドの宗教哲学環境におけ
る聖典の権威と護教学―仏教認識論における聖典と合理
性」のパネルにおいて次の発表が行われた。

ヘルムート・クラッサー「ダルマキールティの聖典

の非信頼性」

護山真也「聖典に基づく推論 (agamāśrītanumāna)

と聖典により矛盾する不合理 (agamavivodha)

の関係について」

サラ・L・マクリントック「カマラシーラの聖典と

根拠について―『タットヴァサンガラハ』におけ

る自己推理の限界と範囲」

これらの発表を聞いてみると、仏教思想が異教徒との哲
学的議論を行うようになり、経典のもつ意味合いに変化
が生じたことを認識せざるを得ない。現代の我々が宗教
的価値観の影響を受け、経典の内容に付加価値を付す傾
向にあるのに反して、仏教をダルシヤナと捉えた当時の
論師たちは、異教徒との共通基盤の上で論争をしなけれ

ばならず、聖典の内容をより合理的に理解していたように思える。

さらに休憩をはさんで、同じ「インドの宗教哲学環境における聖典の権威と護教学―非仏教思想の伝承における聖典の権威」のパネルにおいて次の発表が行われた。

丸井浩「ヴェータにおける用例と『シユローカ・ヴァー

ルティカ』「教令スートラ章」とニヤーヤ文献に

おける「言語証言 (śabda)」への特別な言及で

の *prāmānya* の意味の検討」

ラファエロ・トレッラ「Prasiddha ṽ Pratibhā」

先ほどの仏教における経典に対する態度と非仏教文献における聖典観の相違は、これらの発表からも明らかである。それはそのまま、インドの主流派におけるヴェータ文献と非主流派の仏教経典に対する聖典観の相違がそのまま現れているのであろう。この両者が論争する際には、仏教側は客観的な認識根拠に依存する傾向が生じたのではないだろうか。

終了時間は午後七時を回っており、この後にさらに総会が開催される。連日、早朝からこの時間まで発表が行われていることはマニアにとっては、充実した時間を堪能できる一週間である。さらに京都の夜の研究もあろうが、ホテルに直帰し、翌日の発表原稿を確認する。

この日の他の部会の仏教関係の発表としてはジャイナ研究の部会で、

八木綾子「『アングッタラ・ニカーヤ』II IV. 195

再考」

が行われている。

九月三日 発表当日である。仏教学の部会では、筆者の参加するパネルに先立ち、次の発表が行われた。

山中行雄「『ヴェッサンタラ・ジャータカ』のネパー

ル写本について」

松村淳子「スリランカで知られる『ヴィヤーグリー・

ジャータカ』とその北伝版との関係」

あらためて仏教文献資料の多様性を認識されるが、言語学の観点からも、単一文献がサンスクリット語、中期インド語、古典中国語、チベット語資料をもつという重層性の意味を再認識する。それが言語学だけでなく、歴史学などの他分野までに波及することは、仏教学のもつ学際的研究方法の可能性を示している。

筆者参加のパネル「シャーンティデーヴァと『集菩薩学論』」は、まず主催者である斎藤明先生の発表から始まった。

斎藤明「『集菩薩学論』と『入菩提（菩薩）行論』の関係の調査」

スザンヌ・ムロジック「『集菩薩学論』の身体に関する説教」

望月海慧「シャーンティデーヴァとディーパンカラシュリージュニャーナ」

ポール・ハリソン「『集菩薩学論』におけるシャーンティデーヴァの偈頌—新たな英訳と研究」

『集菩薩学論』という単独のテキストに対して、彼の他のテキストとの関係、テキストの内容の思想的意味、テキストが与えたその後の影響、そしてテキスト自身の再考と多方面から焦点を当てたバランスのとれたパネル設定となっている。

筆者の発表は、同論を外部から捉えたもので、ディーパンカラシュリージュニャーナの著作における同論の引用、彼の編纂した経典アンソロジーとの引用経典の比較、そして彼に帰される『入菩提（菩薩）行論』の注釈書に関するものである。少し欲張りすぎた内容であり、最初のものさらに論点を絞った方が充実したものになったと反省した。彼の『菩提道灯論細疏』には、経典の孫引きを含め、『集菩薩学論』の強い影響が及んでいる。

午後の仏教学の部会では、次の発表が行われた。

クリステイナ・シエラー|| シャウプ「『金光明経』の落ち穂拾い」

イェンス|| ウヴェ・ハルトマン「『宝積経』により

例証されるような大乘經典のテキスト伝播」

ジェーン・E・ブラールヴィック「原始大乘と『カターヴァットウ』」

チェ・ジンギョン「アシュヴァゴーシャの『サウンダラナンダ』におけるヨーガ体系」

インゴ・ストラウシュ「ガンダーリ語での大乘經典における阿闍佉国土」

ジョナサン・A・シルク「『迦葉品』の偈頌における模倣混淆サンスクリット?」

エルザ・レジットエイモ「スコイエン・コレクションにおける断片写本—ピンビサーラ王の転向」

オレグ・ベンツ、ステラ・サンダール「ブツダの特相—医学的考察」

筆者も参加した前回の国際仏教学会の「大乘經典」のパネルのような発表が続いている。これは大乘經典研究が現在の仏教学研究のトレンドの一つであることを示すものでもあるが、これはシルク教授の影響があるように思

える。我が国でも、東アジア仏教の影響を受けた先入観を排除した見方で、インドの大乘經典史を再構築することが求められている。

各部会の発表終了後にさらに、大谷大学のショバ・ラニ・ダシュ博士と学生による「ウトカラの響き—オリッサの古典民俗舞踏」のパフォーマンスが行われた。

この日の他の部会における仏教関係の発表としては、「詩・戯曲・美学」の部会において、

リンダ・コーヴィル「アシュヴァゴーシャの『サウンダラナンダ』におけるチャクラヴァーカ鳥—カーヴィヤのイメージにおける仏教の歪曲」

「叙事詩とプラーナ」の部会における「マハーバーラタ」のパネルにおいて、

グレッグ・ベイリー「『マハーバーラタ』における法王と初期仏教文献における法王」

「歴史・碑文・美術史」の部会において、オスカー・フォン・ヒヌーバー「言語学的実験—ア

ショーカ碑文と初期仏教文献における言語と同一性」

「哲学」の部会における「インド哲学の史的記述と年代化（三）」のパネルにおいて、

ヴィンセント・エルティンガー「六世紀の仏教思想をどのように理解するかーインド哲学史における不連続と（穏健な）形式主義」

が行われた。

九月四日 個人的には最終日となるが、京都駅南口のホテルから地下鉄とバスを乗り継いで京都大学に向かう。連日の通学した先で著名な学者たちと出会うと、海外の大学にプチ留学したような気分になる。

仏教学の部会は次の発表から始まった。

中村綾子「アーラヤ識の機能に関するステイラマテイの見解」

ヨーヴィータ・クラマー「インド・チベット文献に

おける心の特徴づけー瑜伽行派における意・染汚識・アーラヤ識の概念」

キム・ソン Chol「MSU VIII.21.2に引用される偈頌について」

瑜伽行唯識派の研究については、これまでは初期文献を思想的に掘り下げていくものが多かったのだが、今後はステイラマテイや無性などの注釈者の思想的特徴の解明、あるいはチベット仏教文献の解釈などに焦点が当てられるのであろう。これに続いて、

パク・チャンガン「阿毘達磨俱舍論積」第三章第二八偈の acaryas と yangacarabhumikas とは何か」

チン・ケン「撰大乘論積」におけるヴァスバンドゥの prabhavita の語の用例の再調査」

チェ・キュンア「俱舍論積」における自己同一性の問題」

ヴァスバンドゥに対する研究がまとめられているが、い

ずれも解釈上の問題を論じるものである。

午後の部会は、次の発表から始まった。

バンシダル・バット「ブツダの最初の瞑想修行における最初の *Khecari* テクニック」

村上真完「インドの他の宗教・思想体系と比較した

仏教の我」

ウルリッヒ・ルスラー「心理学と論理的シンメトリー
の美—仏教における「三種の個」再考」

いずれもが仏教の根本的な命題を扱うものであるが、特に我をめぐる議論は常に仏教研究の主題の一つとなるものである。我が支配するインドの思想体系における仏教の位置関係を考える上でも、仏教が我の概念をどのように受容し、あるいは拒絶したのか、またその意図は何かなどを思想史のコンテキストでとらえることは重要なことである。

休憩の後に次の発表が行われた。

カレン・C・ラング「アーリヤデーヴァの『四百論』

第十四回国際サンスクリット学会報告(望月海慧)

第八章第八—二偈に対するチャンドラキールティの注釈における *pravṛtti* と *nivṛtti*」

マックス・デイク、ティボール・ポルシオ「陀羅尼を読む—敦煌出土の不空金剛の翻字とチベット

訳から見たインドの *śītaśāstra* に関する諸問題」

ウルリッヒ・ティンメ・クラフ「ラクシュミンカラの『*Sahasraśāhīpadhāri*』のチベット語訳
作成について」

仏典のチベット語訳に関する興味深い発表も続くが、ここで少し学会の場を離れ、先日の残りの宿題をこなすために、上賀茂神社を訪れる。バスを降り、一ノ鳥居から入り、参道を本殿に向かう。本殿内の参拝ツアーに加わり、説明を受けると、京都あるいは平安京がもつアイデンティティーとは仏教だけではないということを確認する。平城京からこの地に遷都され意図も含めて、この神社がもつ意味は大きいのであろう。急いで境内の散策をして大学に戻る。

夕方のセッションでの仏教学の部会は、次の発表が行われた。

八木徹「adhiṣṭhāna に関する覚え書き」

久保継成「法華経に描写される Saṃdhabhāṣya」

いずれのチームも『法華経』において重要な概念とされているが、インドの論師たちはこれらの語をどのように解釈していたのかを知りたい気もする。大乘経典の思想的な研究はインドよりも東アジア、さらには現在の仏教学研究の方が原典の深読みをしすぎているようにも感じる。

この日の他の部会での仏教関係の発表としては、「宗教史」の部会における「解釈学（一）」のパネルで、

ジョン・ガネリ「チャンドラキールティ、解

釈学と単調性」

オーギュスティン・トッタカラ「ヒンドゥー教と仏

教—相互多産の過程」

「哲学」の部会で、

ビルジット・ケルナー「自己認識に関連した無限廻及の議論—ディグナーガとダルマキールティの類似」

パスカル・ユゴー「ダルマキールティは兎の角を掴んだのか—ダルマキールティ派の認識論における所量の範囲の再評価」

小林久泰「プラジュニャーカラグプタの二諦説と論証について」

J・C・ヴェスターホフ「『廻詮論』に記述されるようなナーガルジュナの言語哲学」

クリステイーナ・ペッチーナ「ダルマキールティの著作における事物の生起の推論」

渡辺利和「ダルマキールティによるサーンキヤ理論における無常性批判」

江崎公見「anyaś cānyo sphaṭīkaḥ—『ニヤーヤ・ストトラ』3.2.14に対するウッディヨータカラの『ニヤーヤ・ヴァールティカ』における仏教の刹

那滅批判

マイケル・S・アレン「仏教と非仏教の刹那滅」

狩野恭「アートマンの論証に対するダルマキールティ

「反論の論理構造」

吉水清孝「どのようにして言葉により事物に言及す

るのか—デイグナーとクマーリラの間の外延理

論における別の相違」

「タイにおけるサンスクリット研究」の特別パネルにお
ける、

S・N・ウパディヤヤ「碑文と考古学的人口遺物に

より証明される八世紀から一三世紀の初期タイに

おける金剛乘仏教」

の発表が行われた。特に哲学の部会では、仏教論理学の
発表が主たるものとなっている。論理学と言うツールが
異教徒と共有するものとなっているために、彼らとの論
争が多くの文献に見られる。そのためにインド哲学の主
要な研究対象となっているのであろう。

第十四回国際サンスクリット学会報告（望月海慧）

最後の発表終了後、前日のパネル参加者で食事をする
ことになっていた。斎藤先生に会わせる顔もないのだが、
一緒にタクシーに乗り、他の二人の宿泊先に向かう。先
生が好い言葉をかけてくれるものの、自分の中ではこん
なものではないはずだったのにと自己嫌悪になってしま
う。四人で向かった祇園では小路では、一人だけ沈んで
おり、反省点のみが頭の中を駆け巡っていた。

なおこの日の晩には、大阪外国語大学の学生らによる
ヒンディー語での『夕鶴』の上演も行われた。また学会
を通しての企画展として、「慈雲」と題する展覧会が開
催されており、彼の『梵語津梁』の紹介が行われていた。
日本におけるサンスクリット文献研究の出発点を知る上
でも貴重な資料である。

九月五日 学会最終日であり、研究発表は午前中で終了
し、午後はエクスカージョン後に、コンファレンス・デイ
ナーが予定されている。残念ながら次週の印度学仏教学

会の発表資料を翌日曜日に完成させなければならないスケジュールのために、本日中に身延まで戻らなければならず、晚餐会の参加は時間的に不可能である。エクスカーションについては、京都国立博物館の「シルクロード文字を辿って」を希望していたのだが、参加者不足のために不成立となっていた。それ故に最終日は学会には参加せず、帰宅して次の学会準備のための時間を取ることにした。

研究発表については、仏教学の部会において次の発表が行われた。

ラタ・マヘーシユ・デオカール「仏教と辞書編集に
関するいくつかの所見」

マヘーシユ・アショーク・デオカール「パーリ文法
家の予測されるサンスクリット資料」

S・N・ウパディヤヤ「インドにおける仏教遺跡…

政治的・経済的問題」

また特別パネル「タイにおけるサンスクリット研究」に

おいても次の発表が行われた。

サムニャン・ロルムサイ「アシユヴァゴーシヤの
『サウンダラナダ』と『ブッダチャリタ』に示
されるような譬喩の世界」

チラパット・プラバンドヴィディヤ「碑文と考古学
遺物により証明される八世紀から一三世紀の初期
タイにおける密教」

いずれも興味深い発表であるが、いつもの地下鉄乗車口
を通り過ぎ、駅北口のバス乗り場に向かう。修学旅行生
で込み合うバスで向かう先は、京都国立博物館である。

サンスクリット学者も、今更このような展覧会には来な
いのかなと思いつつ、向いの三十三間堂を三十年ぶりに
見学してから、身延への帰路に発つ。コンファレンス・
ディナーの代わりに、自宅で家族と夕飯をとることにな
る。

今回の報告では、仏教学に関連する発表のみに言及し
ているが、これは学会の全体の一割にすぎない。国内の

学会ではサンスクリット関連は、インド学・仏教学の一部会でしかないという印象があるが、ここではその立場が全く逆転しているのである。

次回は、二〇二二年の一月にインドのデリーで開催される予定である (<http://www.sanskrit.nic.in/wsc15.pdf>)。そんな先の話に思いをめぐらす暇もなく、数日後に京都駅前の同じホテルにチェックインをしたのである。